第二十三講　漢文の読解①

Step 1

一　次の文章を読んで、後の㈠～㈢の問いに答えなさい。

楚人有渉江者。其剣自舟中墜於水。遽刻其舟曰、「是吾剣之所従墜。」

舟止。従其所刻者、入水求之。舟已行矣。而剣不行。求剣若此、不亦惑乎。

（「呂氏春秋」より）

書き下し文

楚人に江を渉る者有り。其の剣舟中より水に墜つ。遽かに其の舟に刻みて曰はく、「是れ吾が剣の従りて墜ちし所なり。」と。舟止まる。其の刻みし所の者より、水に入りて之を求む。舟は已に行けり。而も剣は行かず。剣を求むること此くのごときは、亦惑ひならずや。

（注）楚……古代中国の国名。
遽……大急ぎで。
所従墜……落ちた場所。
所刻者……目印を付けた箇所。
而……しかし。

若此……このようなやり方をすること。

惑……愚かである。

(一) 文中═「刻ミテ其ノ舟ニ」に、書き下し文の読み方になるように返り点を書きなさい。

刻ミテ　其ノ　舟ニ

(二) 文中――「求ムルコトレ剣ヲ若キハレ此クノ」とは、どのようなことを指していますか、次のア～エから最も適切なものを選びなさい。

ア　水の中に剣を落としたのに、落とした本人ではなく、目印を付けた別の人が剣を探すこと。

イ　舟は移動してしまったのに、その舟に付けた目印を頼りにして、水の中に落とした剣を探すこと。

ウ　水に投げ入れた目印が流されてしまったのに、そのことに気づかないまま、落とした剣を探すこと。

エ　すぐに舟から飛び込んだのに、目印が何であったかを忘れてしまい、勘を頼りに落とした剣を探すこと。

㈢ この文章の中で、楚人の行動はどのようなことのたとえになっていると考えられますか、次のア〜エから最も適切なものを選びなさい。

ア 困ったことがあっても、何も対策を立てないでいること。
イ 他人に責任をとらせ、自分は何もしないままでいること。
ウ 遠くばかり見ていて、身近なもののよさに気づかないこと。
エ 古い習慣にこだわり、時の流れについていっていないこと。

【群馬県】

Step 2・3

二　次の文章Ⅰ、文章Ⅱを読んで、あとの問いに答えなさい。文章Ⅱは、文章Ⅰのもとになった漢文である。

文章Ⅰ

（李広は弓の名人で、以前、勇猛な虎をたった一矢で射止めたことがある。）

（李広）（李広は）また注1冥山の陽（南側で狩りをした）に猟す。また　①　、矢を没して羽を飲む（矢は羽根の部分まで深く突き刺さった）。進みて（近寄って）これをみるにすなはち（なんと）石なり。その形、虎に類す（似ていた）。

退きて（いったん離れてもう一度）さらに射るに、注2鏃破れ（くだけ）注3幹折れて石は傷つかず。

余、かつてもつて注4揚子雲に問ふ（私は、以前にこのことについて）。子雲（揚子雲）曰はく、「至誠あれば、すなはち（そのときには）注5金石ために開く（至誠のために割れる）。」と。

文章Ⅱ

（李広）復猟二於冥山之陽一。又見二注6臥虎一射レ之、没レ矢飲レ羽。進而視レ之乃石也。其形、類レ虎。

退而更射、鏃破幹折而石不レ傷。

余、嘗以問二揚子雲一。子雲曰、「至誠、則金石為開。」

（「西京雑記」より）

注1　山の名。
注2　矢の先端のとがった部分。
注3　矢の先端と羽根を除く棒状の部分。
注4　中国古代の学者。
注5　金属や石のような硬いもの。
注6　寝そべっている虎。

Step 2

1　文章Ⅱの「曰(いハク)」の読み方を、現代仮名遣いに直してすべてひらがなで書きなさい。

Step 3

2　文章Ⅰの[①]には、文章Ⅱの「見(み)二臥(が)虎(こ)ヲ一射ルニレ之(これ)ヲ」を漢字仮名交じりの文にしたものが入る。その文として最も適当なものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア　臥虎を射るにこれを見　　イ　臥虎を見これを射るに　　ウ　これを射るに臥虎を見
エ　これを見臥虎を射るに　　オ　見臥虎を射るにこれを

Step 3

3　次の会話は、文章Ⅰについて、授業で話し合ったときの内容の一部である。あとの(1)、(2)の問いに答えなさい。

Aさん「矢を射て近寄ってみたら、［②］だったとは驚きだね。」
Bさん「しかも、矢が深く突き刺さっていたなんてね。」
Aさん「でも、二度目の矢は刺さらなかったね。なぜかな。」
Cさん「射る前から［②］だと分かっていたからだと思う。常識的に考えたら矢を深く突き刺すことなどできるわけがないよね。」
Bさん「揚子雲という人は『至誠あれば、すなはち金石ために開く。』と言っているね。」
Cさん「漢和辞典で意味を調べたら、『至誠』には『このうえなく誠実な心。まごころ。』とあるよ。」
Aさん「なるほど。心から虎だと信じる、誠実で純粋な気持ちがあったからこそだね。」

(1)　［②］にあてはまる言葉として最も適当なものを、文章Ⅰから**一字**でそのまま書き抜きなさい。

(2)　「至誠あれば、すなはち金石ために開く。」とあるが、揚子雲は李広の体験から、人間の生き方や考え方に関してどのようなことを言おうとしているか。右の会話の内容を踏まえて、**四十字以内**で書きなさい。

【福島県】

第二十三講　漢文の読解①

Step 1

一

解答

(一) 刻ミテ二其ノ舟ニ一　(二) イ　(三) エ

解説

(一) 二字以上戻って読む場合には「一・二点」を用いる。

(二) 「舟は已に行けり。而も剣は行かず」ということを考慮しないで、水中の剣を探すことを指している。

(三) 楚人は舟が動いてしまっているにも関わらず、舟が停まる前に付けた目印を参考にしようとしている。つまり楚人が頼みにしているのは「以前の出来事」であることをおさえる。

口語訳

楚の人で大きな川を渡る者がいた。その人の剣が船から水の中へと落ちてしまった。その人が大急ぎで舟に（目印を）刻み付けて言ったことには、「これが私の剣が落ちた場所である。」と。舟が停まった。その目印を付けた箇所から、水に入って剣を探した。舟はすでに（剣を落とした場所から）動いてしまっていた。しかし剣は（落ちた場所から）動かない。剣を探すのにこのようなやり方をすることは、なんと愚かであるか。

Step 2・3

二

解答

1、いわく　2、イ　3、(1)石　(2)誠実で純粋な気持ちで行うと、常識的には不可能なことでも達成できるということ。（38字）（同意可）

解説

1、語頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」にする。

2、「一・二点」は、「一」のついている字から「二」のついている字へと戻って読む。「レ点」は、一字戻って読む。

3、(1)「進みてこれをみるにすなはち石なり」とある。(2)「心から虎だと信じる、誠実で純粋な気持ち」があると、石でも深く射ることができたという季広の体験から考える。

口語訳

（李広は）また冥山の南側で狩りをした。また寝ている虎を見てこれを射たところ、矢は羽根の部分まで深く突き刺さった。近寄ってこれを見たところ、なんと石であった。その形は、虎に似ていた。いったん離れてもう一度射たところ、鏃はくだけ、簳は折れて石は傷つかなかった。

私は、以前にこのことについて揚子雲に尋ねた。揚子雲は「誠実で純粋な気持ちがあれば、そのときには金属や石のような硬いものでも至誠のために割れる」と言った。